いっしょに歩こう！

奨励	三木 メイ〔みき・めい〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター専任講師 日本聖公会司祭
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

（ルカによる福音書　10章25―37節）

主はシオンを慰め
そのすべての廃虚を慰め
荒れ野をエデンの園とし
荒れ地を主の園とされる。
そこには喜びと楽しみ、感謝の歌声が響く。

（イザヤ書　51章３節）

「きずな」は大切、だけど・・

今日は今学期最後の水曜チャペル・アワーですが、この春学期は、「愛は、すべてを完成させるきずなです」という新約聖書のコロサイの信徒への手紙の言葉を統一テーマとして、さまざまな奨励者からメッセージをいただきました。この言葉を統一テーマに選んだ理由の一つは、「きずな」という言葉が、２０１１年の東日本大震災以来いろいろなところで大切なキーワードとして用いられることが多かったからでした。思いがけない大災害に遭遇して、日常生活を支えていたすべてのものを失ったときに、人と人との「きずな」がいかに大切かということを多くの人びとが改めて実感したと思います。そういう想いは、大震災が起こった後しばらくの間は、被災地から遠く離れた地域で生活していた私たちにもヒシヒシと感じられるものでした。でも、あの日から今日で１年４カ月余り経ちました。関西に住んでいる私たちは、当時も今も、毎日、食料・水・情報などが自由に手に入りますし、大学での生活も支障なく続けていられます。他人からの特別のサポートを受けなくてはどうしても困る、生きていけない、という緊迫した状況が身近にあるわけではありません。「きずな」という言葉が、皆さんの心のなかで少しずつ過去の言葉になってきた、という感じはないでしょうか。いかがでしょうか。一つの言葉が、ある時代・ある状況を象徴するキーワードのように使われた場合、時間が経つにつれてその言葉が過去のものになっていくということは、しばしば起こることなのではないでしょうか。

「愛」は大切、だけど・・

聖書の言葉は比較的新しい部分でも１９００年前ですから、いわばかなりの「時代もの」ですが、繰り返し語り継がれて、今も私たちに何らかのメッセージを与えてくれるのですから、考えてみれば不思議なことです。その聖書が物語る一番大切なテーマは「愛」です。ただ、この「愛」が大切だということは頭で分かっていても、具体的にはどういうことなのか、さまざまな捉え方があるし、よく分からない。そういう疑問は、私たちももちますが、イエスが生きた時代の人びとのなかにもあったのでしょう。彼はさまざまなたとえ話で人びとに語り伝えています。

今日読んでいただいたルカによる福音書の箇所は、とても有名な「善いサマリア人」と言われる箇所ですが、もう一度よく見てください。この箇所は、まず前半の部分に大切にすべき「愛」が二つの方向性をもって書かれています。最初の一つは「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」という神に対する愛。そして二つ目が「隣人を自分のように愛しなさい」という人に対する愛です。「善いサマリア人」のたとえ話は、この二つ目の愛について語られています。この話は、そのまま読めば何を伝えたいかが誰でも理解できる内容です。けれど、当時の時代背景を考えて深く読み込んでいくと、すぐには気がつかなかった多様なメッセージが込められていることが分かってきます。他者への「愛」を実践する時、しない時の、人の心のなかの葛藤が隠されているのです。

心のなかの葛藤を越えて

このたとえ話は、イエスがユダヤ人の律法の専門家に話しています。話に登場する、追いはぎに襲われた人とサマリア人はもともと知り合いではなさそうです。当時、ユダヤ人はサマリア人とは歴史的に関係が良くなくて、日頃からお互い交流を避けていたと言われています。当時は自分たちの仲間ではないという意識が、ユダヤ人とサマリア人の間にあるのが当たり前だったと思われます。

もしも、親しい関係の人が助けを必要とする状況に遭遇したら、私たちはすぐに助けなくては、と思って行動しますよね。しかし、全く知らない他人だったら、どうでしょうか。たとえば、通学途中で近くにいた知らない人が熱中症か何かで突然倒れたとしたら、どんなことを考えますか。おそらく、どうしよう、何とかしなくちゃ、と思うのと同時に、でも今ここで時間を使ってしまうということは授業に遅れるか欠席せざるを得なくなってしまうな、それは困るな、誰か他の人がこの人の世話をしてくれたらいいのに、と頭のなかでグルグル考えてしまうのではないでしょうか。

このたとえ話を普通に読んでいるときには、自分だったらサマリア人のように助けて、この祭司やレビ人みたいに見過ごして行ってしまうことなんてしないわ、と何となく善い人側に立って読んでしまいます。が、よく考えてみると、私たちの心のなかには、このサマリア人のような援助の手を差し伸べる心もあれば、この祭司たちのような自分を守りたい心もあるのではないでしょうか。その二つの心の間で、人は葛藤するのです。

そこで、このたとえ話の二人の間に隣人としての「きずな」が生まれたのはなぜかを考えてみると、サマリア人が自分自身を守ることよりも、そして相手と自分が親しいかどうか、敵対関係にあるかどうかにこだわるよりも、もし自分が相手の立場だったらどうしてほしいだろうかを真摯に考える「隣人愛」の心をもって、それを実践したからです。自分の心のなかに起こる葛藤を乗り越えて、あなたはこういう愛を実践していけますか。イエスはそのことを問いかけるために、このたとえ話をしたのではないでしょうか。

命の危機を経験した人々と共に

私たちは日常生活で直接、追いはぎに襲われた人と出会うわけではありません。ですから、このたとえが何を象徴していて、今の私たちにとってはどういう意味があるだろうか、と思い巡らすことが重要になります。

この追いはぎに襲われた人は、突然大きな強い力で命の危険な状態にされてしまっています。この人にとっては、それは防ぎようのなかった出来事で、極めて弱い立場にあり、誰かの援助が必要な状況にあります。追いはぎ事件は日本ではあまり起こらないとしても、こういう人びとは、現在も私たちの社会や世界のなかにたくさん存在しているのではないでしょうか。武力闘争や飢饉で難民となっているアフリカの人びともそうですし、東日本大震災の被災者の方々もそういう経験をしてこられた方々です。ですから、キリスト教会は教派を問わず、さまざまな支援活動をしてきましたし、今も継続しています。「善いサマリア人」のたとえでイエスが語り伝えたように、人種や民族や国の違いを越えた隣人愛の実践としての支援活動を行うことが、キリスト教会が神様から与えられている重要な使命だ、と信じているからです。ですから東日本大震災以後、被災者支援のための献金が、海外各国のキリスト教会から日本の教会に多く寄せられてきています。

ただ、宗教団体による被災者支援活動はほとんどメディアに載らないので、一般の方々はほとんどご存じないだろうと思います。実は、今日の奨励題の「いっしょに歩こう！」は、日本聖公会というキリスト教の教団の被災者復興支援プロジェクトの名前から取りました。被災者の心に寄り添って「共に歩む」という姿勢を大切にするという方針で「いっしょに歩こう！プロジェクト」と名づけられ、仙台市内に本部を置き、東北各地でのさまざまな復興支援活動を続けて２年目に入っています。まだいつ終わることができるかわかりません。被災者の方々と復興の道のりを行けるとこまでいっしょに歩こう。イエス・キリストのあとに従う者としての使命を、そういう形で果たそうとしているのです。

神への愛とは

もう一つの「愛」のテーマは、神様に対する愛です。神信仰をもたない人に理解してもらうのが難しい「愛」です。聖書に記されている神様はスケールが大きすぎて、その全体を人間が把握することは不可能です。旧約聖書には、この宇宙と地上の世界を創造し、植物、動物、人間を創造し、命を与えて生きるものとしてくださった神が語られています。神は、厳しい父のようでもあり、慈愛に満ちた母のようでもあり、人を見守りながら、自然豊かな園に住まわせてくださった。それをこの神話を書いた人は「エデンの園」と名付けました。「喜び、楽しみの園」という意味です。最初は、神様が見て「良し、これでいい」と思われた世界です。しかし、自由な意志を与えられた人間は、自ら罪に陥りエデンの園を追われてしまいます。それでも神はこの罪深い人間を見捨てないで、見守り続けます。神様は人を愛してくださっているからです。新約聖書には、この人間に罪のゆるしを得させ、神の愛を悟らせるために、救い主イエス・キリストをこの世に派遣された方として語られています。

この神様の大きな愛を頭ではなく心で悟り、その神の愛を信じるのが、信仰です。それは自己中心的な思いからではなく、神の愛の視点から、世界を見る、人を見る、自分を見ることにつながります。そして、すべての命を造った神が今の世界と私たち人間をご覧になったら、どう思われるだろうか、と考えるのです。「心を尽くし、思いを尽くして、神を愛する」とは、そういうことです。隣人への愛は、この神の愛と不可分なのです。

「荒れ野」を
「喜びの園」に

人は長い歴史のなかで、たびたびこの地上を「荒れ野」にしてきました。それは戦争であったり、また環境汚染であったりします。
今日のもう一つの聖書、イザヤ書51章は、紀元前５２０～５３０年のバビロニア捕囚時代の終わりごろに書かれたものだろうと思われます。シオンとは聖なる都エルサレムのことで、イスラエルの王国が滅亡して約50年間、人びとがバビロニアで捕らえられていた間に、廃墟となり荒れ野となった都の状態を嘆いて、いつか神様があのエデンの園のように、喜びと感謝の歌声が響くところに復活させてくださることを信じて、預言としてのヴィジョンを語っている箇所です。

私たちの日本は、今ある意味「荒れ野」になっているのではないでしょうか。殊に原子力発電所の事故による放射能汚染という深刻な事態に直面して、未来に向けても大きな不安が広がっています。

これまでの原発に依存して成り立ってきた社会と、それを作ってきた私たちの生き方を問い直して、新たな社会を築いていくための方向転換をすべきだという声が大きくなっています。２０１１年末ごろには、原発依存の社会から脱け出すべき、という内容の声明文が、カトリック教会の司教団から、そして仏教界からも公表されました。そして２０１２年になってからは、プロテスタント諸教派の団体も次々と声明を出しました。私の所属する日本聖公会は、２０１２年５月に開催した全国総会で「原発のない世界を求めて」と題する声明文を採択して公表しました。その一部分をご紹介します。

「（前略）原子力発電そのものが燃料採掘の段階から廃棄物処理にいたるまで、弱い立場に追いやられている人々に犠牲を強いるものであり、たとえ発電所の事故がなくても、それは神から与えられたいのちを脅かすものであることは否定できません。また、人々の犠牲の上に成り立っているという点で、イエス・キリストの教えに反するものだと言うことができます。（中略）

私たちは、まず、現在の事故において脅かされている人々、そしてこの地上のすべてのいのちを守るために祈り、イエス・キリストに従う者として公に発言すべきだと考えます。（中略）

私たちは教派・宗教を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、愛し合い、支え合って生きる世界を目指します。神がこの地を祝福し、地の平和を取り戻してくださいますように。」

隣人と共に歩いていく、愛をもって歩いていく、それは小さな一つの人間同士の関係から、現代社会に生きる人びと、豊かな自然、一つの平和な地球にまでつながる、大切な「きずな」を形成していく道につながっています。

私たちにすばらしい自然と共に生きる喜びを与えてくださったことを、神様に感謝して歩んでいきましょう。イエスを通して愛と平和を教えられたことを感謝して歩んでいきましょう。そして、私たちが、苦しむ人と共に歩み、悲しむ人と共に歩み、荒れ野を喜びの園に回復するにはどうしたらいいのか、真実の平和を実現していくためにはどうしたらいいのか、共に考えながら、いっしょに歩んでいきましょう。

２０１２年７月25日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録